

ある在朝日本人詩人の流浪 —朝鮮総督府鉄道局職員・山部珉太郎—

森 田 智 恵

本稿の目的は、植民地朝鮮の日本人植民者が社会運動へめざめる契機およびその挫折の様相を個人史の観点から明らかにすることである。本稿でとりあげる山部珉太郎は、朝鮮総督府鉄道局の職員として官側で働きながらも同僚らとプロレタリア文藝誌を発行し、あとにそれが官憲側から発売禁止の処分を受ける。以降もなお山部は社会運動への関心を抱きながらも戦時期になると植民地支配政策を推進する目的で総督府鉄道局から刊行された雑誌の編集長となる。そのような特徴的な経歴をもつ山部の思想的変遷がいかなるものであったのかを明らかにすることで、本稿はこれまでの在朝日本人研究とはことなる新たな観方を提示することになるだろう。

は じ め に

本稿は朝鮮総督府鉄道局の職員として植民地朝鮮にくらしながら、一時期は社会運動に関心をもち、抑圧のない世界を念じた山部珉太郎（本名・宮内健九郎）の生涯を、個人史の観点から跡づけるものである。山部は植民地朝鮮で一貫して、雑誌の編集作業にたずさわっていた。まず総督府鉄道局の同僚らと同人誌『機関車』を1927年に刊行したが、その内容がアナキズム傾向にあることから創刊の翌年には発売禁止処分をうけた¹⁾。その後総督府鉄道局が発行する、朝鮮初の観光雑誌『観光朝鮮』（1939年6月創刊）の初代編集長をつとめた。本稿の課題は両誌の編集過程における山部の葛藤の諸相を検討し、いち植民者の社会運動への気づきとその挫折の様相を明らかにすることである。

山部珉太郎は『山部珉太郎詩集』（私家版、1957年）の出版によって知られるようになり、かれの故郷である愛媛のいち詩人として紹介されてきた²⁾。歴史学的観点から山部に注目した研究はこれまでにないが、山部はさしあたり在朝日本人史と社会運動史のなかで考えてみるができる。これまでに在朝日本人社会の全体像にかんしては木村健二により基礎研究がなされ³⁾、近年では李東勲が在朝日本人社会の形成過程について総括的な研究をおこなっている⁴⁾。なかでも在朝日本人を統治権力に従属する「草の根

の植民者」⁵⁾として位置づけた高崎宗司の研究は、在朝日本人を植民者と捉えるうえでの普遍的な視角を提示したといえる⁵⁾。ただしそのような在朝日本人への観方はぬりかえられつつある。李昇燁は政治運動、内田じゅんは経済活動に着目し、統治権力と交渉しときに脅威になりうる独立した存在としての在朝日本人像を描き出している⁶⁾。

そのように統治権力にたいする方法は社会運動という植民地支配に批判的な認識を持ち、社会変革をめざすかたちでもあらわれていた。植民者とはいえ在朝日本人にたいしての取り締まりが厳しくなかったわけではない。1919年三一運動をうけて制令第七号が施行され、さらには1925年に治安維持法が日本本国と同時期に植民地朝鮮に施行されたことにより反体制的な思想をもつ在朝日本人を罰する法的根拠ができる⁷⁾。これまでは治安維持法によって検挙された在朝日本人について、個人に注目した研究がある⁸⁾。近年では、水野直樹が1930年代前半の在朝日本人が関与した社会運動の諸相を考察している。水野はかれ／かのじよらは微弱な影響力しかもたなかったと留保をつけながらも、植民地主義を乗り越えて水平的な世界をめざした存在として、社会運動を実践した在朝日本人の歴史的意味を見出している⁹⁾。

水野論文が在朝日本人による社会運動の全体像を捉えようとしたとすれば、本稿はそのような社会運動に参加する諸個人の内面的動機を個人史の観点から内在的に検討しようとするものである。植民者である在朝日本人がなぜ社会運動に関心をもったのか、またなぜ挫折し思想的に屈折したのかを朝鮮における当時の思想潮流および在朝日本人にたいする植民地当局の抑圧との関連から検討してみたい。そのような作業をとおして植民者でありながら同時代的な権力批判の思潮に共鳴する、在朝日本人の多面的なすがたをそこに見出すことになるだろう。

ここで本稿の主資料である『山部珉太郎詩集』(以下、『詩集』)について、くわしく説明しておきたい。本稿の記述は、おおくを『詩集』から再構成している。『詩集』は山部の死後にかれの遺言を引き継いで、『機関車』の編集長であった岡田弘が中心となって編集をし、1954年に同人らとともに自費で出版された¹⁰⁾。目次はつぎのようなものである。「序詩／第一篇仔豚の散歩、第一章 生活の緩徐調^{あだあじお}、第二章 仔豚の散歩、第三章 お母さんと空想の戀びと、第四章 朝鮮風物詩／第二編 常身独愁記、第一章 王様酪酊、第二章 城津にて、第三章 木履哀唱／後記」となっており、編集後記もふくめると169頁におよぶ。個々の作品のタイトルは、付表3を参照されたい。なお各作品がいつつくられたのかについて詳細は判然としないが、第一篇は1924年から1928年まで、第二篇は1928年から45年までの作品であると思われる。

『詩集』出版の構想自体は、山部による。『機関車』が発売禁止処分をうけてから翌年にはふたたび同人雑誌『花冠』を岡田らと出版していたのだが、その第3号には『詩集』の出版予告を出していたという。当時に山部が『詩集』を出版しようとした背景について、岡田は「『機関車』発禁を契機として眼をひらいた社会運動への関心ともからんで、一応清算の気持ちもあつたと思う」と述べている¹¹⁾。なお『詩集』の装幀(図2)を担当したのは、この『花冠』時代の同人の白鳥鳩三である。岡田が表紙と装幀を依頼したところ、白鳥は表紙に「朝鮮仏」を描いた¹²⁾。

『詩集』の全体構成については、岡田が大幅に手を加えている。第一篇は山部の手帳に残されていた自選詩集の目次や各章ごとの主旨を構成そのままにまとめたという。ただし「第四章 朝鮮風物詩」については岡田のセレクトで4, 5篇の詩を加えている。第二篇は、すべて岡田の選集による。岡田の編集方針は「いわゆる(森田一運動に)飛び出して行つた草山や土屋(森田一山部の同僚)にたいする敗北感を中心に、独自のスタイルが漸次出来上つて行く過程を捉えたいと思つて、詩と共に散文めいたものや落書のごときものや少なくとも珉太郎的な文章はなるべくかきあつめて珉太郎らしさを偲びたい」というもので、『機関車』廃刊以降の山部の生活とそのなかでの葛藤をよみとれるような作品がまとめられている¹³⁾。

後記は山部の息子であり愛媛で俳人として活動した宮内克樹による俳句「父憶う」、山部の4番目の兄、『機関車』同人や鉄道局の同僚らによる回想録である。山部の人となりや交友関係を伝えるとともに、在朝日本人の生活の諸相を教えてくれるものである。

以下、第1章では山部珉太郎が朝鮮へわたるまでの経緯を概観する。第2章では、1920年代の植民地朝鮮における思想潮流をふまえながら、同人『機関車』の活動を詳細に明らかにし、山部が社会運動にめざめていく様相を追っていく。第3章では、雑誌『観光朝鮮』の編集過程における山部の葛藤と苦悩、わずかながらの抵抗のようすを描出する。なお本稿末には山部の年譜(付表1)を付してあるので、適宜参照されたい。

図1 朝鮮時代の山部珉太郎



出典：『山部珉太郎詩集』巻頭

図2 『山部珉太郎詩集』表紙（左）と裏表紙（右）



1 「内地」時代の山部珉太郎

1.1 詩作への関心

山部珉太郎こと本名・宮内健九郎は、10人兄弟の5番目として愛媛県温泉郡小野村（現・松山市北梅本町）で1905年に生まれた。尋常小学校の卒入学の年度について詳細はわからないが、19歳まで松山中学校に在籍した。卒業後すぐの1924年に、南満州鉄道株式会社京城管理局に就職するために朝鮮へわたった。1933年に総督府鉄道局城津鉄道事務所へ転勤となるが、『観光朝鮮』の編集長に抜擢されたことから1936年には営

業課に異動となり、京城へ戻ってきている。帝国日本が敗戦し朝鮮が植民地支配から解放されたのちには故郷である小野村に「引揚」をするが、翌年には病気で亡くなった。

朝鮮にわたるまで山部が過ごした小野村は、国会開設にさきだって1888年に制定された市制・町村制の公布にともない、7つの村を合併統合し再編された村である。1893年には愛媛の中心部である松山と小野村をむすぶ伊予鉄道が開通するようになった¹⁴⁾。山部の父は農家のひとり息子であったが、農仕事は作男に託して自身は商業を営みながら、憲政会の活動的な構成員となり、選挙が来るたびに地方政治家を家に呼んでいたという。「やかましや」な山部の父にたいして、忍従で「内助の功に世帯の辛勞一入」であった母は、後述するように朝鮮での山部の詩作に影響を与えている¹⁵⁾。このように大正デモクラシーを背景とした、父の政治への主体的参加や明治維新以降の国家形成期を経て変わりゆく小野村の様相を目の当たりにしながら山部は成長していった。

山部の詩作への関心は、幼少期からはじまる。4番目の兄とともに小遣い2回分の10銭を貯めて、当時30万部前後を販売し少年少女の心をつかんでいた『日本少年』を買っては、とりわけ読者の支持を集めていた有本芳水¹⁶⁾の詩を愛誦していたという¹⁷⁾。大正デモクラシーの影響を色濃く反映し少年詩ブームの端緒となった少年雑誌『日本少年』に影響を受けて、山部は詩の世界にのめりこんでいく。

小学校を卒業してから中学校に進学するあいだには、兵役から戻ってきた最長兄のなかば強引なすすめで陸軍幼年学校を二度受験したものの、二度とも不合格となっている。4番目の兄からみれば、山部は受験に「一向気乗りしていない」ようだったという¹⁸⁾。その背景には、かれがもともと丈夫なからだではなく「運動会の花形¹⁹⁾」ではなかったこともあるが、幼年学校の受験期から文学書を愛読するようになり、文学につよい関心があったことがあるだろう。夏目漱石の『坊っちゃん』『草枕』やゲーテ『若きウェルテルの悩み』、生田春月の詩を熱心に読んでいた²⁰⁾。

ここでは、山部の詩風および『詩集』から読みとれる山部のアナキズム思想の底流には生田春月の影響があると思われるためかれについて紹介しておこう。生田春月はその伝記を書いた上田京子によれば「人生詩派といえる一面を持ち、口語調のわかりやすい抒情詩で多くの人に迎えられた。結果として詩作への入門的役割を果たした²¹⁾」と紹介されている。実際に、生田が1918年に新潮社から出版した『新らしき詩の作り方』は1927年の時点で77刷を重ねるベストセラーだったという²²⁾。時期的にも山部が同書を参考にしながら詩のつくりかたをまなび、習作にとりこんでいたと見ていいだろう。

もっとも山部への影響を考えるうえで重要な点のひとつは、生田が思想的にアナキス

トであったことである²³⁾。生田が24歳のころ、1916年に大杉栄や堺利彦と研究会を開いて生田はしだいにアナキズム思想にめざめ、詩にもアナキズム思想を反映させるようになっていた。上田によれば、生田は「詩の本質はアナキズムである」「詩は反逆の精神から生まれる。少くとも自分の解する詩は一切の法則に対する反逆である」とつねづね口にしていたという²⁴⁾。かれは詩作のほかに、マルクスの理解者であり革命的な詩を残したハイネを翻訳していた²⁵⁾。山部が社会運動に関心をよせた直接的な契機は、後述するように朝鮮での人脈によるところが大きい。社会変革を志向する思想の下地には生田春月の生き方とかれの詩があったと思われる。

そのように文学に関心をよせていた山部が本格的に詩作をはじめるのは、松山中学校に入学してからである。山部は陸軍幼年学校の受験に失敗したのち、田舎から入学できたら優秀とされていた松山中学校に、200人中11番の成績で入学した²⁶⁾。小学校の同窓生も、かれを「秀才」だと記憶している²⁷⁾。中学在学時の18歳から20歳のあいだには謄写版刷りの同人雑誌『青りんご』を刊行し、習作82編を詩作した²⁸⁾。1930年代後半に『観光朝鮮』の編集長へと抜擢された背景には、中学時代からの雑誌の編集経験があるのである。

1.2 朝鮮行き

日本が朝鮮を植民地として支配する歴史的過程において、政治的侵略と並行して「内地」から朝鮮へわたる人びとが明治時代以降に増加し、在朝日本人社会は形成されていた。とくに朝鮮半島から地理的に近い西日本出身の人びとが中心に朝鮮へ移住し、植民者となっていった²⁹⁾。おおくは経済的に窮迫した人びとであったが、山部もそのような植民者らと同様の理由で朝鮮へわたっている。10人の子を産んだ山部の母は10人目の末子が病死してまもなく45歳で夭折し、父も山部が朝鮮へわたったその年に亡くなった³⁰⁾。山部は大家族に生まれながら、早くに両親を亡くしたために経済面でけって豊かではなく学問の道に進むよりは家計を支える必要に迫られた。

そこで山部は中学卒業後すぐの20歳を迎えた1924年に、4番目の兄と妹とともに朝鮮へ向かうこととなる。朝鮮総督府鉄道局で技手として働いていた最長兄が山部を呼び寄せた。こうして、1924年当時は朝鮮総督府鉄道局が経営を委託していた南満洲鉄道株式会社京城管理局経理課に山部は就職した³¹⁾。そのような進路をとった山部にたいして、4番目の兄・倬三は「肌違いの経理課の役人仕事に携はつたことも生活環境から已むを得なかつた運命の皮肉」であったと回顧している³²⁾。

山部が朝鮮へわたる直接的契機となった最長兄に山部が言及することはないが、山部の朝鮮での生活および思想形成にすくなくない影響を与えたと思われるため、最長兄である宮内丈三郎の経歴をみておこう。最長兄は植民地当局のなかに身をおき、そのなかで社会上昇していく。宮内丈三郎は1887年生まれで、山部より18歳年上である。1910年に東京高等工業学校機械科を卒業した翌年の1911年4月に朝鮮総督府で勤務するために朝鮮にわたっている。1913年6月には鉄道局の技手として働きはじめ、以降は清津や平壤の工場長へと昇進している。1937年には鉄道局を退職し、鉱産、土木、水道、電気関連の機械、工具類を製造販売する弘中商工株式会社を1937年6月に設立し、理事に就任している³³⁾。日中戦争以降、弘中商工株式会社は戦争を支える企業のひとつとなっていた³⁴⁾。

山部との関係性について詳細は判然とはしないが、同じく朝鮮にいらながらも山部とはいちどもともにくらしはしていないようである。ここで重要な点は、山部にとって最長兄の存在が社会運動に関心をよせる契機でもあり、他方で社会運動に傾倒しきれない「重し」となっていたのではないかということである³⁵⁾。亡くなった父のかわりに家長としての役割を担ってきた最長兄は、陸軍幼年学校の受験や朝鮮行きといった進路の節目において山部の人生を規定してきた。他方で4番目の兄は『花冠』刊行にあたって資金面で山部らを支えたが、最長兄はそうではなかったようである。山部や一緒にくらしていた4番目の兄がおなじく朝鮮で暮らしている最長兄にくわしく言及しないだけに、むしろ山部の思想形成に暗に影響をおよぼしていたのではないかと思われる。

2 社会運動へのめざめ

2.1 京城でのくらし

山部は咸鏡北道南部の城津鉄道事務所に転勤する1935年までは、京城で日本人が集住する若草町で4番目の兄・倬三と妹・やよいの3人でくらしていた³⁶⁾。妹は足が不自由で働くことができず、妹を家に残して兄とふたりで早朝に職場にむかうようすが詩に残されている³⁷⁾。そのように働き手が2人いらながらも、鉄道局経理課で働いていても山部は経済的にくるしい状況にあった。当時の朝鮮総督府『職員録』に山部の氏名が記載されていないことから、雇人あるいは傭人という非正規で薄給の身分であったと思われる³⁸⁾。よって山部らは生活がくるしくなり高利貸しから借金をしていた³⁹⁾。その業者らが金をとりたてに来るようすを詩「給料日」に書いている⁴⁰⁾。ここから読みとれるの

は、植民者のなかでも下層に位置づけられる自身の現況を詩作することで、カタルシスを得る山部のすがたである。

びんぼうがすわつてうごかないので／このごろ ぼくたちは／いくぶん 唇をゆがめてわらひます／給料日には／びんぼうがことさら身近く寄り添ふので／ことさらしげしげと貧乏の顔を眺めいつて／いくぶん 唇をゆがめてわらつてやります／給料日には／じょうずに笑顔を塗つた訪問者たちが／ぼくを忘れずにやつてきて そばにすわるので／いい顔してかれらをむかへ／てぎわよく応対してかへします／かうして つぎの給料日まで／ぼくたちの生活を冒すものとてもなく／ちいさく ほこりかにぼくたちは暮すのです／それで給料日には／色彩にぎやかなお菓子屋にはいり／ちよこれえと百もんめ買つて／上機嫌ですたこらかへつてきます／-ゆうべ ぼくたちは ちいさい会議をひらいて 今月の家賃をはらふまいと決議しました-

貧乏な山部らを見ては「唇をゆがめてわらつて」いく高利貸しを、山部は手際よく追い返し、給料日の前日に借金の返済拒否を家族会議で決め込んでいる。ついには給料日当日に借金を踏み倒して、「ちよこれえと」を買って「上機嫌」になっているのである。

この山部の詩には、貧乏を諧謔にかえる精神的余裕がまだあるし、それを詩全体で表現するように音律のテンポが小気味よい。本人は、この詩を書いた時期をつぎのように回想している。「兄妹三人の…深くつきつめた懐疑などのなかつた静かな生活、願はくば世の中を祝祭のごとくほがらかに暮らさうと思つてゐたらしい生活、よろこびも悲しみも不平も怒りも甚だしい波曲線を作らなかつたあだあじお（森田—*adagio*, ゆるやかに)⁴¹⁾」。京城へきてまもなくの頃は、穏やかにくらしていたのである。

そのような生活のなかでも、足の不自由な妹の存在は山部の生活にかげを落としていた。「ふしあはせないもうと」という表現は『詩集』にたびたび登場する。2つの詩「ひもじいゆうぐれ」と「いもうと」は、妹が「びつこさん」であるがゆえ、なにがあっても妹を怒ることができず、当時では結婚適齢期を迎えつつある19歳のかのじよを「はなやかな令嬢」にする夢を山部はひとり抱くものの、望むべくない心情を伝えている⁴²⁾。

貧乏であったというだけで、山部は社会主義に関心を寄せたのではおそくない。かれの家族環境から、山部はしだいに社会的下層に位置づけられる人びとに注目するようになっていったのではないか。

そのような理解にたつうえで、山部にとって母の存在も重要である。『詩集』の第三章の表題が「お母さんと空想の戀びと」であるように、夭折した母は理想上の「母」となって山部の詩をつらぬく、ひとつのモチーフになっている。山部は詩「秋は昔のお母さんの顔である」のなかで、秋を「古い哀傷の浴室^{ばするうむ}」とたとえて、そのような季節に「納屋の裏木戸に蹲つたお母さんの顔つき」、「やさしい顔を憶ひうかべ」ている⁴³⁾。

山部が母を想起するとき、失われた母を重ねるかのように詩になって歌われるのは、朝鮮語で母親をさす「おもに」と息子をさす「あどり」娘をさす「カシナ」ら親子のすがたである。詩「ゆうぐれ・お伽話が跼躑んでゐる」では、「あどり…／おもにといつしよにみればさびしくないか／しろいおもにをとりかこんで／ぼつそりしやがんだあどりたち／青い・赤い…／みんなカチがらすの啼き声で育つたんでせう／おもに・わたしはあなたのお伽話がききたい」とうたっている⁴⁴⁾。詩「生活」のなかでは、おわりの2行に「おんどるのなかによれよれとよごれて／こんな貧乏な生活はいつまで続くのか／おもに・あほし・あどり・いつたいどんなことを思ひながら暮らしてゐるのか」と、書いている。さきほどの詩同様に山部が朝鮮人の生活を垣間見ようとし、その内面世界を知りたいと感じているようすがうかがえる⁴⁵⁾。そして、くるしい生活に追いやられている朝鮮人らがなぜ現況を批判しないのかと、つぎに引用する詩「おもに・添景」のなかでかれは嘆く。

甕を頭にいただいてゆくおもにたち／あなたがたの古甕のやうな生活なんかほくにはあんまりはるかな空想です／ただポプラの木の間を見えかくれ／ゆうぐれの川沿ひみちを消えてゆく／あなたがたの黙りこんだ姿が好きです／・泣いてみる 泣いてみる／おもに・わづか風景の一片ぢやないか⁴⁶⁾

ここで、山部は「おもにたち」を「黙りこんだ姿」と表現したり、かのじよらの生活の営為を「古甕」にたとえるように、朝鮮人が感情を発露させることなく粛々と過ごさざるを得ないすがたを批判的にみている。ただし当時の社会状況、すなわち日本人による朝鮮の植民地支配そのものにたいしては鈍感であるように思われる。山部にすれば、自身とおなじく社会の下層に位置づけられる存在として、共感のまなざしから朝鮮人たちをみていたのである。

山部が社会主義に傾倒していく思想的な下地には、かれ個人の経験があるだろう。すなわち山部が朝鮮へわたってから、なおも「内地」の生活と同様に貧乏に過ごしながら

ら、しだいに「母」や「いもうと」を想う心情が「おもに」や「あどり」らへの視線となり、下層階級に位置づけられる朝鮮人の民衆に関心を寄せるようになっていったのである。

2.2 『機関車』の刊行

山部が朝鮮でくらしはじめた1920年代なかばは、日本本国でも植民地朝鮮でも階級をめぐる言説が盛んになる時期である。その政治的背景には三一運動ののちに斎藤實が総督に就き、その「文化政治」の一環で、制限的であるし厳格な検閲をともなったが朝鮮人の出版物刊行を許可したことがある。

そのようななか三一運動を経て朝鮮に本格的に受容された社会主義系列の勢力が社会運動を展開した。そのなかで共産主義者とアナキストが袂を分かち、反駁しあうようになっていく⁴⁷⁾。のちの1927年に共産主義系列と民族主義系列の民族統一戦線となる新幹会の発足につながるような民族主義系列の活動もこの頃から精力的に展開された。社会運動のみならず文芸の側面でも、プロレタリア文学運動が三一運動以降に広がり、1925年にはプロレタリア芸術同盟(KAPF)が設立される。このように1920年代は帝国主義に対抗する民族解放の言説や階級をめぐる議論が活発化する一方で、民族独立または階級闘争のどちらを優先するかといった方針のちがいがからこれらの諸派が角逐する時期にあった。

在朝日本人のあいだでも、しだいに階級闘争の議論がくり上げられるようになる⁴⁸⁾。そのような渦中にいたひとりが、『朝鮮公論』の詩壇選者をつとめながら出版物が発禁処分を受け、1928年には朝鮮から追放され日本本国ではプロレタリア詩人として知られた内野健児である⁴⁹⁾。1926年には京城詩話会を設立し、翌年には亜細亜詩脈へと改組した内野は当時に詩人タゴールを朝鮮に紹介し、朝鮮詩人会を組織し雑誌の刊行を企図していた金億と協力しながら抵抗的詩作の輪を広げていた。微小な勢力ながら、植民地社会をゆるがすような朝鮮人と日本人の連帯が文芸活動をとおして生まれつつあった⁵⁰⁾。

内野をリーダーとする、この『亜細亜詩脈』に山部以外の『機関車』同人らが参加していたのである⁵¹⁾。だが『機関車』同人らは『亜細亜詩脈』の創刊当初から、その方針に不満を感じていた。実際に『亜細亜詩脈』はダダイズムの影響が見られたり、恩地孝四郎に手がけられたその装幀がロシア構成主義の影響をおもわせる前衛的なデザインであるものの、全体としてはやや牧歌的な生活詩があったりと内容にばらつきがあっ

た⁵²)。『機関車』編集長の岡田弘からみれば『亜細亜詩脈』は「その成立当初から、既に詩誌としての本質的な一貫した主張を欠き寄り合世帯の弱さを見せていた」,「特に一部編集委員の独断による変更が露呈して漸次精彩を欠いて来」ていたのである⁵³)。内野の実弟である壮児がドイツ語でインターナショナルについて詩「ハウ劇場」を書いたことにより『亜細亜詩脈』が発売禁止処分⁵⁴)をうけた次号の編集後記では、編集部が「『ハウ劇場』が思想的に忌避されたのです。併し乍ら本誌は何も一種の主義宣伝の雑誌ではない」と述べているように⁵⁵)、内野とそのちかしい人物らには共有されている反権力的な志向性が雑誌に貫徹されているわけではなく、上述したように雑誌づくりから社会運動に発展しうる気勢は『亜細亜詩脈』にはなかったように思われる。そのような雰囲気をかきとっていた岡田らは同人誌『機関車』を立ちあげることにした⁵⁶)。なお山部は『亜細亜詩脈』に参加していたわけではなく、1927年4月にひらかれた同人『詩祭』の集まりではじめて山部と岡田は会い、岡田のほうから山部に声をかけたことにより親交がはじまった⁵⁷)。岡田によれば『詩祭』は「甘い女学生向の詩の会」であり、山部が飽き足らないようにみえたという⁵⁸)。

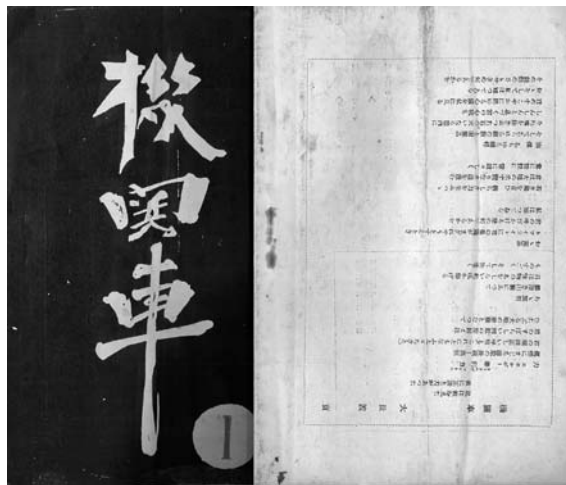
このような『機関車』創刊の経緯から『機関車』は、内野健児らがかたちづくっていた在朝日本人のあいだでの反権力的言説づくりのイズムをさらに推し進めることを目的としてうまれた雑誌だといえるだろう。内野健児はつぎのように『機関車』に言及している。「ぼつりぼつり詩への苦行者も現はれてきて何とはなしに半島詩壇もしだいに黎明期の希望を孕んで来るのである」と評価しており、その創刊を歓迎していた⁵⁹)。

同人らが雑誌の製作を決意した1か月後の1927年6月5日に、『機関車』は創刊された⁶⁰)。岡田弘の自宅である吉野町1丁目126を、機関車の事務所とした。第1号から第3号までの定価は15銭で、35頁前後の分量であった。同人は、東牧人(本名:加藤八十一)、岡田弘、草山蛇之介(本名:宮武佳辰、のちに合田佳辰)、大世渡貢、山部珉太郎(本名:宮内健九郎)である。職場はみな同じではなかった。東牧人は京城中学校の教員、岡田弘は龍山駅の貨物係、草山蛇之介は永登浦駅の切符売り、大世渡貢は龍山の倉庫管理をしていた⁶¹)。山部はこの当時も龍山の鉄道局経理課で勤務している。東牧人のみが鉄道局員ではないが、かれは1925年の1年間を鉄道従事員養成所の教諭として働いていたことから、岡田らと知り合う機会があったと思われる⁶²)。

『機関車』の創刊号表紙は、アナキズムを象徴する黒旗そのものである。全面真っ黒の背景に、中央に白い文字で「機関車」と筆を打ちつけるようにタイトルが書かれている。同人の合田は「創刊号は真黒な表紙に「機関車」と誰かの若々しい肉筆をリノリー

ムに刻み込んで浮き出してあった。その表紙からも感じとれるように、同人の思想傾向は「アナキズムに近かった」と回顧している⁶³⁾。このことについて合田はさらに、つぎのように述べている。「加藤氏を除き全員、鉄道で働いている二十一、二十二の青年ばかりなのに職場を中心とした組織活動に向かはなかつたのは不思議と云えば云えるが、当時のアナキズムの立場と力量からは不思議でなかつたろう⁶⁴⁾」。ここでは日本本国と植民地朝鮮で当時は影響力のあったアナキズムの思潮に、在朝日本人たちが思想的影響を受けていたことが示唆されている。扉表紙には「小心火車」「汽車に注意すべし」「고차를 조심마오」と、中国語、日本語、朝鮮語で同意の文句を斜めに印字しており、読者層を日本語話者のみに限定しない『亜細亜詩脈』からの影響を思わせるものである⁶⁵⁾。

図3 『機関車』創刊号の表裏表紙



わずか1か月の準備期間で創刊したため、明確な思想方針をたてなかつたのか、創刊辞はない。ただし奥付には「同人雑誌である◇売るために作ったのではない◇機関車には確たる目的と理想がある◇好い作品ならば同人外といへども採ることあり」とある⁶⁶⁾。

では『機関車』の「確たる目的や理想」とは、いかなるものであったのか。それは『機関車』というタイトルの名づけにもかかわる。まず『機関車』というタイトルは、第一にかねら同人が鉄道局の局員を中心にしていただからあろうが、社会運動的な意味付けもしていたと思われる。それをよみとく手がかりは、創刊号に掲載された大世渡貢の散文「機関車構成」にある。もっとも、これは『機関車』創刊の前年に日本本国で中野

重治が発表した詩「機関車」をオマージュしたものと思われるため、紹介しておきたい⁶⁷⁾。

「機関車構成」の書き出しはつぎのことばではじめられる。「近代民衆の創造せる厭倒的芸術最高品「機関車」の構成部分に就きその概略を述べる」。その「機関車」の構成部分は「A Boiler (ボイラー)」「B Fire Box (ファイヤ・ボックス)」「C Smokebox (スモーク・ボックス)」「D Frame (フレーム)」「E Valve Gear (バルブ・ギヤー)」「F Teder (テンダー)」からなると大世渡は説明し、各項目には2, 3行の説明が加えられている。長くなるが、概観しておきたい。「A Boiler」は「わたしたち無産者の額ににじみ出た汗が滴々とたまって沸騰し、大なる膨張力」をもつ場所であり、「B Fire Box」は「私たちの下らない生活意識小ブル的な意欲」を燃やし、「その熱で新しい力を生産せうとするところ」であると意味づけている。「C Smokebox」は「無産階級意識を充実せしめ、常に溢るゝ咆吼をもつて私たちの存在を明らかにするところ」であり、「D Frame」は「機関車の動力発生部と走行部の境界である、即ち最も力強いプロレタリア生活意識の基礎」であり、「私たちの如何なるものであるかと云ふことを意識して行く礎」だと述べている。「E Valve Gear」は「機関車の原動力を配給して、有効に牽引力を発生せしむる装置」であり、「すべてのものが総合しすばらしく連絡し機関車の進出に当つてゐる結合部分で私たちの大いに学ぶべきところ」としている。「F Teder」、すなわち炭水車は「機関車の後部についてみて燃料及水を積載してゐる車」であり、私たちの書庫、兵糧庫に外ならないもの」と類比している⁶⁸⁾。

この散文は、『機関車』は徹底的にプロレタリアの視点に立脚するのだというかれらの宣言文であるといえよう。また『機関車』の営為の射程は「無産階級意識」や「プロレタリア生活意識」を充溢させ、詩作活動をとおしてその外延を押し広げようとするこゝろにあったといえるだろう。

刊行を重ねるとともに思想の方針がより明瞭になってくる。第3号の表紙には、エスペラント語で機関車を意味する「LA LOKOMOTIVO」が表記されるようになった。さらに同号の編集後記では、つぎのように同人らが創刊当時を回顧している。「決して我々は自慢する訳ではないがこうした雑誌の存在は内地でも珍しいことだと思ふ、特に朝鮮ではこうした純粋同人雑誌の存続は殆ど不可能とされてゐる、そこへ我等は我等の機関車を発行したのだ」。さらには「機関車は常に真先に走るのだ」と『機関車』の先見性と勢いを自負している。編集後記には在朝日本人と朝鮮人に呼びかけるつぎのことばで締められている。「朝鮮に於ける友よ、沈滞の底に蠢く日本の文藝に眼覚ましい爆

弾を投げつけてやらうではないか⁶⁹⁾」。したがって『機関車』同人らはその読者層を植民地朝鮮という地理的範囲に限定せず日本本国を射程に入れており、果てには「ブルジョア文学」が地位を占めている「日本の文藝」の現況を変革しようとしていたといえる⁷⁰⁾。

2.3 『機関車』における山部の作品

ここで、山部が『機関車』に掲載した文章をみておきたい。あらかじめ述べておくと、山部は『機関車』の編集過程で社会批判的な思想をみにつけていく⁷¹⁾。山部の作品をみるさいに重要な点は、ほかの同人らの文章と比較して朝鮮人の生活を注意深く観察し、その生活の様相を朝鮮人の視点から描こうとしていることである。

『機関車』第2号に寄せられた「朴爺さんの小さい家」は、階級を問わず普遍的に人びとが愛する朝鮮の駄菓子や雑貨を売る、鉄道がはしる線路のガード下にある商店を営む朴爺さんを主人公とした短編小説である⁷²⁾。日本人が書く小説のなかではめずらしく、日本人は登場せず、朝鮮人の視点から植民地社会をとらえようとした作品である。そのなかでは近代の産物である機関車は下層民にすれば忌むべきものであって「不清潔なガードだった。それに物凄い噛みつくような音響も怖かつたし、みんな早く通り抜けたいとばかり思って急いだ」、そこに店を出す「朴爺さんは、とかく抹殺され勝ちだった」といったように、ブルジョアが利用する機関車の恩恵をけって受けずにむしろ害を被るプロレタリアのようすをよく観察し描いている。

そのようなガード下を通るのは「洋服を着た勤め人」や「教養のある男女」ではなく「腹の減った工場労働者や、屑拾いの鮮童^{チヨンガー}」が、朴爺さんの出店にたちよった。夕暮れになると朴爺さんは店をたたみ、近所の飲食店に商品を預かってもらっていた。年寄りふたり暮らしの家ではおもにが栗飯を炊いて待っているが、労働のあとに一杯ひっかけずにはおられない。あぼじ（父の意味、ここでは朴爺さんのこと）は酒を飲みながらおもにを思い出し家に帰るのだが、おもにも「勿論あぼじを大切に」しており貧乏ながらふたりは仲がよい。その翌日飲食店を営む親方の妻が火事を起こし、朴爺さんの店の商品をすべて灰にしてしまう。朴爺さんは「たいへんうろたへ」、しまいには「大声で何事か怒鳴り」はじめたが、すぐにおもにに事態を伝えにいく。春雨の降るなかで焼け跡まで駆けていったおもにがそれをみた途端「大声で泣き出し」、またどこかに駆けだしてしまう。あぼじもまた「あいごう、おもに、あいごう、おもに……」といて「悲しい」気持ちをこらえながら、おもにを追いかける。

ここで、作者の山部がつぎのようにことわりをいれる。「(この話はここで、こんなに悲しく終るのではない)」。4日もたたずに夫婦は普段の生活をとりもどし、商店も「誰れがあんなにいい店をつくつてくれた」のかはわからないが「かうして店が出来れば、爺さんもばあさんも悲しむことはないのだ」、「店さへ出来れば、買ひてはいつでもあるものだ」とやや展開が性急ではあるが結末を明るくしている。

この小説のなかで山部の朝鮮人にたいする観方が、当時の植民者のなかではとりわけ子細であることはよくみてとれるだろう⁷³⁾。夫婦仲や夫婦の泣き方がステレオタイプな朝鮮人にたいする表象の域を出ないが、その朴爺さんの店をとりまく共同体の結束——ここでは商店がなくなることを憂いだれかの助けにより白い材木の商品棚がつくられ商店が立て直され、夫婦が日常に戻ることを肯定的に描いたものとして捉えられる。ただし先述したように「工場通ひの汚れた職工」や「きたない子供」^{アドリ}「屑拾いのチヨンガー」がプロレタリアとして描かれるのみで、その近代的な階級社会をうみだす一因となった帝国日本の植民地支配にたいしての描写はない。

『機関車』第3号の詩「爽快な奴等」は、首都である京城に数多くいた孤児の夜の生活をとりあげている⁷⁴⁾。「よごれたあどり」、孤児らを「愉盗の熱情をボロ屑に包んで／街といふ街を旋回する螺旋風」ととらえ、「街裏のゴミ箱をほじくつて／夜盗のごとく迅速に／真瓜の皮でもさらつてゆくのだ」と描写し、盗みという微小な抵抗をとおして近代的な階級社会を基礎とする都市空間に亀裂をいれる存在として孤児に注目している⁷⁵⁾。

同じく第3号には短編小説「神様を絞殺した話」が収録されている。「唯物論タワリシチ (Товарищ のローマ字表記 Tovarisch を日本語読みしたものであり、主に社会主義における同志の意味)」とともに「僕」が『天国行き』のエレベーターに乗って天国に上ったところで神と出会い、神にたいし「『あなたが死ぬると』」と問う。それにたいし神が「『世のもろもろの支配が中心をうしなっておそろしいことになる』」と答えたところで「少々面倒くさくなつた」タワリシチが神を後ろから絞殺する話である。神が死に天国では「天人や天女たち」が慌てふためいているが、いざ下界に戻ると「世のもろもろの支配が中心を失つて、おそろしいことになつてゐるかどうかを確かめるために、街を歩いてみたが何の変りもなかつたので、神さまが嘘をついてゐたことが明らかになつた」と僕達は感じて「『天国天国』と怒鳴つて」、地上のカフェに入っていくところで話は結末を迎える。

この小説における神はマルクス・レーニン主義をさすのであろう。1920年代前半か

ら日本本国においても植民地朝鮮においても共産主義者とアナキストらの攻防が展開されていたのであるが⁷⁶⁾、山部は神殺しという比喩をとおして前衛党をつくり組織化することで実のところそこに権力をうみだしている共産主義者らを批判し、「中心をうしなつて」も問題がないとするアナキスト側にたっていることがわかる⁷⁷⁾。なおこの当時の山部は、社会変革をめざすものたちのユニフォームであるルパシカ rubashka⁷⁸⁾を身にまとうようになっていた⁷⁹⁾。

ここまでみてきたように、朝鮮にわたってから『機関車』に関わるなかで同人らの影響から社会主義思想に接するようになり、そのなかでも『機関車』同人に影響をうけアナキズム寄りの思想をもつようになっていた。ただし朝鮮人にたいしてはあくまで同じくプロレタリア階級にあるものとして朝鮮人を見ており、朝鮮民族の独立にたいしては関心がないように思われる。実際に山部が朝鮮人と個別の交流があったのかはわからない。このような山部の植民地朝鮮への観方、その限界はかれののちの活動からより浮き彫りとなる。

2.4 『機関車』の発売禁止と京城からの逃亡

同人らが社会変革への意識を高めるなかで、1928年2月に刊行予定の『機関車』第5号が発売禁止処分をうけてしまう。その前々年1926年4月に治安維持法に連動して警務局図書課が設置されて以降、朝鮮人と日本人を問わず社会変革をめざす人びとにたいし出版検閲がしだいに強化されていた⁸⁰⁾。『機関車』同人らは朝鮮人と日本人を問わずアナキストたちと連絡をとっており、植民地当局から注視されるようになっていたのである⁸¹⁾。

こうして『機関車』ら同人の社会変革への夢は潰えてしまった。編集長の岡田弘は龍山警察署で説諭を受け、印刷所では印刷自体を断られるようになった⁸²⁾。その後、同人たちは各職場で圧力を受けるようになった。周囲の人びとの援助で資金を工面し、意気込みを持って雑誌をつくっていたかれらは正気ではいられなかった。「僕たちは発禁に刺激されてよく街で酔払い」、山部の家に転がりこみ憂さを晴らしていた⁸³⁾。この頃、山部は散文「落書雑輯—主として一九二八年頃—」のなかでつぎのように胸の内をさらしている⁸⁴⁾。

俺が出来ることと云つたらどんなことだらうか。小説・戯曲・詩などは書けるだらう。芝居もやれるだらう。舞踊もやれる（俺は本能的に踊りたいやうに出来てゐ

るらしい)俺はテロリストとして行動できるだらうか。俺はこのことを極く遠慮勝ちに、小声で云ふ。なぜなら俺はあんまり億劫な性質で、無精で面倒臭がりやだからだ。だがテロ的になるのは俺の一生望むところなのだ。『悲痛の快威』と云ふ奴が、俺には矢つ張りいい生き方のやうな気がする。／俺が差しあたりやれさうなものと云つたら、矢つ張り蛇やグラと一緒に大通りに坐り込んで歌を歌ふことだらう。『一坐り込み哲学』だが俺の鮮少なる経験によれば、巡査さんと話をするのは、すくなからずめんどうなものである。☆／俺は何になりたいとも思はない。／その証拠に、俺は今何になりたいと思つてゐるのかと自問してみるに、一向返答に当惑してしまふからだ。一体なる物があるのか。大臣、大将、教授、金持、役人、職人、詩人、社会運動家、道徳家等々／こんなものは一体なんだ。みんな土偶の坊ぢやないか。／飄々乎として風のごとくなるに如かず。こんなことをクダクダ今頃書く俺だから、俺も大したものぢやない。何だつていいぢやごはせんか。ダンツク！☆ 警官及びそれに類する者たちへ。／バクダンとタドンとよく間違ふことがあります。終り！☆ 青さびた習俗の風情と智慧とを虫ぼしして使つてゐる物わりのいい常識主義者達！／咄！先づそこらあたりにひつくり返つちまへ！

このなかで山部が一貫して批判しているのは、なにものにもなりきれない自身とそのような自身を克服するようにして精力的にとりくんできた『機関車』を廃刊へと追い込んだ「警官及びそれに類する者たち」、すなわち『機関車』を潰した権力にたいしてである。

同人の合田は『機関車』の廃刊を、つぎのようにふりかえる。「日本帝国主義の前身基地朝鮮の一角に芽生えた若き反逆の小さな花は空しく、しぼんだのであつた⁸⁵⁾」。その時期の山部にたいし、同人の加藤は「君には深刻な不満、激しい反抗などが奥深くに燃えて居た様であるが、その不満も反抗も君の口から出る時は慷慨悲憤という様な形をとらなくて聴く者を喜ばせずにおかない愉快的な詩句となり僅かにそこに現れる皮肉味と自虐味が君の内心を覗かせるだけであつた⁸⁶⁾」と回顧している。このように山部は仲間たちには愉快にふるまっていたようであるが、『機関車』の挫折をこの後も引きずることになる。一時的に愛媛に帰郷したさいには「咆えろ朝鮮」という164行にわたる詩を書いたという⁸⁷⁾。

『機関車』が発売禁止となつてからも、山部は雑誌づくりを継続した。1929年には岡田弘とともに『花冠』を出版した。『花冠』を書店の店頭にだすと即日で売り切れたと

いうから、人気を博していたようである⁸⁸⁾。だが岡田によれば山部は「古い詩を出してお茶を濁していた」ように見え、『機関車』の挫折からたちあがれないでいるようであった。さらには『機関車』の廃刊以降も警察当局からは注視されていた⁸⁹⁾。

満洲事変以降、京城でにわかには戦争色が強まる頃、山部は京城の空気に耐えられなくなっていった。朝鮮北部の城津に鉄道事務所が新設されると聞き、1933年に山部は「半ば自棄的」に転勤した⁹⁰⁾。

山部の城津での生活はいかなるものであったのか。知人のいない城津での暮らしを散文「城津でも退屈してゐること」のなかで「城津を非難するつもりではない」と弁解しながら、「城津に来て僕の二十台は終つた。それは僕の青春が消え失せたのと同じ」であり「歌はざる詩人」となった自分は「京城の仲間には明らかに失望させるだろう」と内省し、「城津でも僕は沈滞し停滞し倦怠し孤立し悲しんでゐる」と嘆息する⁹¹⁾。実際、山部は『機関車』の廃刊をさかいに、詩をつくれなくなっていった。1924年には26篇、25年には29篇、26年には40篇、27年には50篇、28年には22篇、29年には13篇、30年には8篇、31年には9篇と、1928年から詩作が顕著に減っている⁹²⁾。

山部は筆が進まない自身の現状に嘆き、這い上がる活路を求めていたようであった。1928年から1933年までの城津への転勤以前に同郷の友人に宛てた手紙には、山部が進退を決めきれずに右往左往しているようすがうかがえる。その手紙には「ものを書く運動なんて、みんなじれたがつているのだ。だから飛び出す機会を覘っている」「ダダの変形的なアナキズムの気持でも（俺達がそれであるかどうかは別として）確かに効果のある運動をなし得ると思うがどうだろうか」「俺たちが今所謂實際運動の真中に入つて出来ることはなんだ、多分邪魔になるきりだ、悪く行けばナグリ飛ばされるだろう」と書いてあったという⁹³⁾。ここで重要なのは、山部が渴望する言論空間は植民地朝鮮にもはやないことから、山部が社会運動にのりだそうとしていた点である。しかし、実際に運動をする人びとと自身とを線引きしたうえで運動の「邪魔になるきり」と自身を卑下し、山部は「ダダの変形的なアナキズム」を選択しようとしている。したがって山部は実践的な運動をするか、そうでなくとも思想的に過激に活動していくか煩悶していたのである。

結局のところ、山部はどちらも選ばなかった。岡田からすれば「社会運動に走れなかつた珉太郎の苦悩は漸次その後の詩にいろいろな陰を落として行き、珉太郎自身の思索はだんだん沈潜し変貌を示していつた⁹⁴⁾」。そのようすは、山部の「結局なに一つやれなかつた自己嫌悪感」を示唆しており、その後の「特異な心境」, 「敗北感」ができあが

っていく過程であった⁹⁵⁾。

同人らと自身を比較して、山部はいっそう「敗北感」を強めていったと思われる。30年代に入ると、1931年に岡田弘は朝鮮総督府鉄道局に勤務する非正規従業員らが多数参加した社会運動で検挙されている⁹⁶⁾。合田佳辰は日本本国にもどってプロレタリア科学研究所に参加しアナキズムからボルシェヴィズムへ「転向」をし、社会運動の過程で検挙、投獄されているように、同人らの一部は『機関車』廃刊以降に社会運動を精力的におこなっていた⁹⁷⁾。同人らが運動をしていてもなお、山部は運動にたいし躊躇していたのである。

3 雑誌『観光朝鮮』の編集と苦悩

3.1 雑誌編集と苦悩

そのような陰鬱な心情をかかえるなかで『観光朝鮮』の編集長に抜擢するとの話がもたらされたなら、承諾せずにはいられなかっただろう。『観光朝鮮』の刊行を企図した鉄道局は、編集者にかなう人材を探していた。鉄道局事務課で書記として働いていた河野通久は適任者の選定を局から依頼され、課の同僚であった岡田弘に話を持ちかけたところで、岡田から山部を推薦されたという⁹⁸⁾。1936年7月5日に辞令が下り、11日に城津鉄道事務所から営業課書記として山部は異動した⁹⁹⁾。これにより、山部はこれまでの非正規の身分から正規職の判任官へと階級上昇している¹⁰⁰⁾。

ただしすぐに『観光朝鮮』の製作にとりかかれたわけではなかった。刊行計画から3年を経て、1939年6月に『観光朝鮮』は朝鮮総督府鉄道局営業課内日本旅行協会朝鮮支部から創刊された。『観光朝鮮』は1940年12月には『文化朝鮮』へと改題したが、1944年12月まで隔月で計30号が刊行されることとなる¹⁰¹⁾。

山部が『観光朝鮮』の編集長を担当したのは創刊号と次号であり、いちど編集長の座からは離れ、1942年12月刊行の通算第20号からふたたび編集長となった。山部にとって『観光朝鮮』の編集は雑誌づくりに従事するという、役所の書類仕事にくらべれば充足感はあるものの、思想的側面においてはさらに自身を苦しめていく作業にほかならなかった。機関車同人らは、この頃の山部が苦しむようすをとらえている。山部は編集をするなかで「『文化朝鮮』にかわり雑誌の内容にもいろいろと干渉があつて不愉快なことも多かつた¹⁰²⁾」であつたろうと同人は推測しているし、実際に山部は「編集者に対する朝鮮総督府の色々な圧迫¹⁰³⁾」があつたことを同人に打ち明けてもいた。『観光朝

鮮』が1940年12月に『文化朝鮮』へ改題する時期、つまり日中戦争の激化にしたがい観光事業が事実上困難になると、もはや観光にかかわる情報は誌面から消えていき、志願兵特集など朝鮮総督府の政策を解説、特集する総合文芸誌となっていた。かつて社会運動に関心をよせていた山部が編集作業に苦悩したことは容易に想像できる。

そのようななか山部自身、日本語常用や創氏改名といった諸制度をとおして日本民族たる精神の内面化を朝鮮人にたいして強要し、他方で日本人にたいして朝鮮人差別をしないように求める植民地支配方針「内鮮一体」を、文化面から推し進める朝鮮文人報国会の詩部委員をつとめるようになっていた¹⁰⁴⁾。当時に山部が読む詩は「今読んで見ても時代感覚のズレもあり、面白くない¹⁰⁵⁾」ものとなり、実際に1943年に発表した詩「海にそびえる」では帝国日本の公権力に抵抗心を抱いていた頃の面影はもはやなく「やまごゝろ¹⁰⁶⁾」をうたい、国策のために尽力すべきとの精神を内面化しているようすがみてとれる。

また山部が『観光朝鮮』とりわけ『文化朝鮮』の改題以降で特派記者となって書いた地方の取材記事では、朝鮮のなかの「古代日本」を見出し、朝鮮における産業開発を国策的に重要だと幾度もアピールする内容を伝えている。釜山の一带を「南鮮一帯に足跡した古代日本人の心魂が、あそこにもここにも息づいている」と言い、さらには「任那日本府の故地金海」は「故郷の村を思い出させる」と郷愁にふける¹⁰⁷⁾。朝鮮北部の金山を「若し国策が金を掘ることを要求しないなら、私だつて金山の紹介などには身が入らぬに違ひない¹⁰⁸⁾」と言い、ついには「勝つことは戦ふ國にとつての至上命令だ。藝術も勝つためにどういんされなければならない¹⁰⁹⁾」と言い放ってしまう。

『観光朝鮮』（のちに『文化朝鮮』）における取材記事のなかでは、当初は個別の朝鮮人との交流のようすがみられるがしだいに朝鮮人であること以上の描写はなくなっていく。『観光朝鮮』創刊号では龍門寺への紀行文を書いているのだが、そのなかでは地方警察署長の紹介から朝鮮人の面長や巡査であり案内人の「成さん」が同行して取材をおこなっている¹¹⁰⁾。それがしだいに朝鮮人にたいし「李光洙氏の言ひ草ではないが、既に顔が変つていて、三十年前まで他国人であつた人とは見えない¹¹¹⁾」と言い、産金に従事する「鮮女工達¹¹²⁾」をたたえ、帝国日本の戦争遂行のために動員される「帝国臣民」という枠組みで朝鮮人をみるようになっていく¹¹³⁾。

3.2 『機関車』の残影

ただしかれがそのように帝国日本の戦争に身を投じていくなかでも、かれの思想が当

時の時代状況にまったく同調していたと結論づけるのは早計であるように思われる。「どんなに世の中が騒々しくなつても、珉太郎は珉太郎なりの歩き方を変えようとしたり変える事の出来るにんげんではなかつた¹¹⁴⁾」という同人からの評価は、ある『機関車』同人と『文化朝鮮』が交錯する、つぎのエピソードからもうかがえるものである。

アナキズムからボルシェヴィズムへと思想を「転向」させたと自身が回顧する、『機関車』の同人である合田佳辰は豊多摩刑務所から出獄したのち、朝鮮北部にある揚水場に就職するため1935年に朝鮮にもどってきていた。その合田が揚水場での仕事から着想を得て、つぎのような散文「うなぎ其の他について」を『文化朝鮮』（第5巻第3号、1943年6月）に寄稿している。その一部をつぎに引用しておきたい。

人生にも、最低限の飯のために、節を屈する例はいくつもある。／わたしはさつきホロにがい微笑をうかべた。／これは、それほど、かなしい、はづかしいことだらうか。／流れに抗する事、餌を追つて、流れを下ることは、両立しない二律背反だらうか。／否々、餌を追つて、流れを下ることは、流れを遡らんがためだ。／餌を追はずして、どうして流れに抗することができようか。／私は魚たちの澁刺たる英雄的とも云ふべき遡流本能の根強さに眩惑されて、／魚もまた餌によつて生くる生物なることを忘却してゐたやうだ。／これも、恋愛の精神的昂揚のみを知つて、肉体的燃焼を知らざる、若き日の夢と同断なりと云へやう。

ほとんど筆を断ってしまっていた合田が、揚水場の鯉や鰻が激流に逆らうすがたを描いたこの文章を、山部はひどく褒めたという。「否々、餌を追つて、流れを下ることは、流れを遡らんがためだ」という一節からは、内心では独立をめざしながら公然たる抵抗をできないため、表面上では体制側にくみする朝鮮人たちを、たんに植民地当局に迎合しているわけではないと合田が訴えているように思われる。実際、この詩にたいして合田はつぎのように回想している。「日本帝国主義の侵略政策—行動に敢然として立ち向かう民衆を魚族に託してたたえたのであるが、この廻りくどい表現を理解してくれるものがあるのがうれしかつた」という¹¹⁵⁾。したがって山部は合田の真意を理解しながら、雑誌に掲載したと思われる。ただし上述したようにこの当時の山部は朝鮮民族にたいする関心を帝国日本の領内にある民族であるとのまなざしで見出すようになっており、山部が朝鮮民族独立という観点から合田の詩を理解したというよりは、その詩風が反権力的であったという点において共感したのだと思われる。

ふたたび合田が寄稿した詩を『文化朝鮮』の巻頭に掲載していることから、やはり山部は合田の詩における反権力的な意図をくみとっていたと思われる。投稿時の作品タイトルは「炭塵」というものであった。その内容はプロレタリア科学研究所のメンバーであった藤枝丈夫が炭鉱で働きはじめたことを合田が聞きつけ、その苦闘する藤枝を想像してうたったものである。ただし『文化朝鮮』（第5巻第5号、1943年10月）巻頭に掲載されたそれには「一炭鉱増産運動によせて」と副題が付してあった。合田はこれを見て「十才も若かつたなら早速抗議を申込む私であつたが、雑誌編集者の苦衷も判るので黙っていた」という¹¹⁶⁾。合田の経歴や思想を知っていた山部が、さきのエピソード同様に詩にこめられた合田の本意に気づかなかつたとは思われない。

これらの一連のエピソードこそ、戦時期における山部に底流する思想をよみとれるものであるように思われる。くりかえすように、合田の詩に内包された詩の真意を反権力的なものであると山部は理解していた。さらに誌面上では炭鉱政策を奨励するようなタイトルへと印象を操作するように手を加えて検閲をすりぬけさせながら、大衆の目につくように、あえて巻頭に詩をもってきているのである。この山部の行動は、いっそう嚴格化していた戦時期の検閲体制をふまえると容易なものではない。合田は当時の山部をつぎのように回顧している。「『観光朝鮮』『文化朝鮮』は「珉太郎の地金は雑誌のどこかに反映するらしく、朝鮮の役所から出るにしては、珍しく垢抜けた」ものであった¹¹⁷⁾。合田のいう「地金」とは、山部がかつてあこがれた社会運動への夢にほかならない。

山部が植民地社会の支配者側に属しており、『観光朝鮮』のなかでの仕事を見るかぎりでも、植民地当局の政策とその宣伝に山部が加担したことは疑いようのない事実である。実際に『観光朝鮮』『文化朝鮮』の論稿や記事の内容はしだいに人びとを戦争動員するための美辞が並べられるものになっていく。その雑誌編集の過程で、山部は自身の思想を曲げていかざるをえなくなった。現実と理想のあいだでアンビバレントな心情をつねに抱いていた。山部が植民地当局にたいする反権力の思潮をつくったわけではもちろんない。ただしかれは植民地当局のなかにとどまり、微小ではあるが、権力にたいして内側から疑問を投げかける仕事をしていたとはいえるだろう。

3.3 帰郷

1945年8月に帝国日本は敗戦を、朝鮮は解放を迎えた。山部はほかの植民者らと同様に引揚げをし、連れあいと3人の子供とともに愛媛県小野村に帰郷した。その後、小

野村ではまず「農業会」につとめた¹¹⁸⁾。山部が引揚げた当時の小野村は、敗戦以降疎開者と引揚者がしだいに帰郷してきていた。当時日本全国で問題化していた引揚者にたいする生活保障は小野村でも重大な事象となっていた。そのようななか小野村では引揚者らが親和会を結成し、旧陸軍の演習場を払い下げて開墾、引揚者村をつくっていた¹¹⁹⁾。

山部らのくらしの詳細はわかりえないが「農業会」では「ハナグスリ程のお給金」しか稼げないわりには、からだを仕事に拘束されることをいやがって辞めている。その後は、兄弟と友人とともに農作業や移動商店をしながら、その日ぐらしの日々を過ごした。山部は帰郷してもなお、経済面で苦悩することとなったのである¹²⁰⁾。

そのようななか、もともと病弱だった山部には無理な肉体労働があたりしだいに衰弱し、1947年12月にその生を終えた。亡くなる1週間前には、『機関車』同人の岡田弘へ手紙を送ろうとしていたという¹²¹⁾。かれにとって『機関車』の同人らは、ことさら特別な人びととして記憶されていたのだろう。

山部の死をうけて、1930年代後半からつきあいのあった鉄道局同僚の河野はつぎのように述べている。「珉太郎の座は、いま、どこに決まったであろうか¹²²⁾」。はたから見た山部は生涯をとおして、反権力にはしるのでもなく「転向」するのでもなく、どちらともつかない思想的な流浪をしていたのである。

さいごに『山部珉太郎詩集』の巻頭に掲載された序詞であり、遺言「煙草と死—山部珉太郎氏の遺言—」を引用しておこう¹²³⁾。

ぼくが死んだら／だれでもいい まいにち煙草に火をつけて／お線香のかほりにたててもらはう／ぼくの骸骨は ごくごく けむりを吸つて／うれしがつて がらあんとまんぞくして／ごくり ごくり 土のそこへと埋もれよう

お わ り に

植民者であり、さらにいえば植民地当局のなかではたらく人が社会運動に関心をよせることは一個人のなかの思想として併存するのであろうか。そのような複雑な問いにたいして、山部は思想的な「流浪」という選択を、受動的にしたように思われる。幼少期の経験、朝鮮での生活を経てアナキズムにちかしかった思想に、『機関車』の編集過程およびその発売禁止を経てプロレタリア階級としてブルジョアに対峙することに自覚的

になっていく。しかし被植民者にたいしてはもとより、植民者にたいしても抑圧的な植民地空間において、その思想を発露できる言論空間はもはやなく、煩悶せざるをえなくなる。その思想のあては官がつくる雑誌の編集の仕事へと横すべりしていく。かといって、かつて胸に秘めた想いを捨てることができずに、また苦悩の日々を過ごす。山部の思想はどこにも帰着することなく、流浪していたといえよう。

そのような思想的流浪のなかで山部は当時の植民者らとはややことなり、朝鮮人の生活をよくみており、そのようすを詩や小説のなかで描いた。だがそれは同じくプロレタリア階級として生活する存在として朝鮮人に関心をもったのであって、帝国日本の植民地支配への疑問からではなかった。よって戦時期に書いた詩や記事は当時の時代状況をうけて、戦争遂行のために植民地朝鮮を包摂する帝国日本を称揚するような内容となったのであり、そこに山部の思想的限界があるといえるだろう。

本稿では山部の朝鮮での生活を詳細に描出する過程で、反権力思想をもつ在朝日本人らの諸活動のようすと、かれらの内面世界をわずかではあるがうかびあがらせることができたことも特徴として挙げておきたい。冒頭でも述べたように在朝日本人および植民地朝鮮における社会運動をあらたな視角からとらえるうえでも、1920年代の在朝日本人の反権力的な諸活動にたいする研究はさらに深められる必要があるだろう。

付表1 山部珉太郎年譜

年	年齢	経歴
1905	0	愛媛県温泉郡小野村（現・松山市北梅本町）で生まれる。10人兄弟の5男。母は末子の産後すぐに亡くなる。
幼少時代	13-15	兵役を終えた長兄の強引なすすめで陸軍幼年学校を2度受験し、2度とも不合格。この頃、夏目漱石『坊ちゃん』『草枕』『三四郎』『それから』『門』、ゲーテの『若きウェルテルの悩み』、生田春月の詩を愛読。
中学時代	17-19	松山中学校に200人中11番で入学。謄写版刷りの同人雑誌『青りんご』刊行。習作82篇を詩作。
1924	19	長兄が勤務していた南満洲株式会社の京城管理局経理課に非正規で就職。26篇を詩作。
1925	20	朝鮮総督府は南満洲鉄道株式会社への経営委託（1917-1924年）を解除。朝鮮総督府鉄道局の所属に。29篇を詩作。父、亡くなる。
1926	21	40篇を詩作。
1927	22	4月20日、吉井信夫の自宅で『詩祭』同人の集まりをもつ。参加者は吉井信夫、山部珉太郎、古屋武、水島良策、藤岡靖子、岡田弘。 5月12日、吉井町一丁目の岡田宅に、大世渡貢、合田佳辰が集い『亜細亜詩脈』と決別し、同人誌『機関車』の刊行を決める。 6月5日、山辺珉太郎、合田佳辰、岡田弘、大世渡貢、加藤八十一の五人で同人誌『機関車』を創刊。この年、山部は50篇を詩作。
1928	23	2月、『機関車』第5号が発売禁止処分となる。 8月、胸を病み3ヶ月ほど愛媛に帰郷する。郷里の封建制に腹を立てる。164行にわたる詩『咆えろ朝鮮』を書く。当時山部は兄・倬三、妹のやよいと3人で若草町155、若草劇場裏手の古道具屋の角に入った小路の奥に居住していた。その後妹は愛媛に帰郷し、兄の結婚もあり同居を解消し、山部は若草町から南米倉町に転居する。そののち、下宿を転々とし漢江河畔の第1益濟寮に落ちつく。この年、22篇を詩作。
1929	24	庄垣内利男、白鳥鳩三、岡田弘、山部で同人誌『花冠』（謄写版四六倍百数十頁）を創刊。人気を得ており、本屋へ出すと即日売り切れ。『花冠』では小説「ニキタ、ユリの悲しみとジヨウの軍艦」を書く。この年、13篇を詩作。
1930	25	8篇を詩作。
1931	26	9篇を詩作。
1932	27	腸チフスの疑いで1週間入院。
1933	28	岡田宅近く、錦町13の鉄道局同僚の平山宅にりんご箱5箱分とともに下宿する。9月城津鉄道事務所開設を聞きつけ、山部はその経理課に転勤。
1935	30	5月21日、結婚のため城津から愛媛へいったん帰郷。6月5日、連れ合いの麻子とともに京城に到着し、その夜には城津へもどる。
1936	31	7月6日、『観光朝鮮』の編集長に抜擢される。朝鮮総督府鉄道局営業課書記の職につく。8月4日、城津から京城の大島町に転居する。
1938	33	合併に建築された官舎に転居する。
1939	34	編集長として『観光朝鮮』を創刊。創刊号と次号の編集長を担当し、以降も取材記事や詩を『観光朝鮮』に投稿。
1942	37	12月、『観光朝鮮』の編集長に復帰。1944年12月の終刊まで編集長をつとめる。
1943	38	編集長を担当する過程では「内地」の作家らと交流。京城ホテルで島木健作氏と会談、濱本浩氏と鴨緑江沿岸を歩いて「鴨江百里」を書く。朝鮮文人報国会の詩部委員をつとめる。
1944	39	4月『機関車』同人の合田や岡田らと同時に召集令状をうける。
1945	40	朝鮮の解放以降、松山に帰郷。一時期は郷里の農業会につとめる。 以後、4番目の兄と行商をする。その間に2畝半の畑、二畝余の田を耕すなどの肉体労働で家計を支える。
1947	42	松山市郊外小野村で死去。法名「建徳院徹心自定居士」。

付表2 雑誌収録作品一覧

発表年月	媒体	作品タイトル
1927.6	『機関車』第1号	おもに・一片の點景
1927.8	『機関車』第2号	朴爺さんの小さい家
1927.1	『機関車』第3号	秋・干鰯
1927.1	『機関車』第3号	爽快な奴等
1927.1	『機関車』第3号	神様を絞殺した話
1939.6	『観光朝鮮』第1巻第1号 創刊号	龍門寺紀行
1939.8	『観光朝鮮』第1巻第2号 新秋金剛山特集号	コスモス二題
1939.10	『観光朝鮮』第1巻第3号 深秋号	満浦線抜き書き
1940.3	『観光朝鮮』第2巻第1号 新年特集号	清津
1940.5	『観光朝鮮』第2巻第3号 芳春号 鬱陵島特集	美しき五月
1940.9	『観光朝鮮』第2巻第5号 爽秋号 京城特集	朱安藍田見学記
1940.9	『観光朝鮮』第2巻第5号 爽秋号 京城特集	京城
1940.12	『文化朝鮮』第3巻第1号 新年特別号 平壤特集	なつかしき南鮮
1941.5	『文化朝鮮』第3巻第3号 佳春号 慶南地帯特集	平元線飛び石伝ひ
1941.7	『文化朝鮮』第3巻第4号 青風号 済州島特集	新線周辺の町々
1941.9	『文化朝鮮』第3巻第5号 明秋号 楽浪地帯特集	風景
1942.1	『文化朝鮮』第4巻第1号 新年特別号 高周波とマグネサイト特集	高周波重工業
1942.3	『文化朝鮮』第4巻第2号 春雪号 黄海地域の鉱産特集	鉛と亜鉛の出る金山
1942.5	『文化朝鮮』第4巻第3号 新緑号 小鹿島更生園特集	静かに五月は
1942.12	『文化朝鮮』第4巻第5号 初冬号 米の朝鮮	海に広がる美田 不二干拓地を見る
1943.1	『文化朝鮮』第5巻第1号 新春号 朝鮮の緬羊	明川種羊場見聞
1943.4	『文化朝鮮』第5巻第2号 特集 戦ふ森林	戦ふ樹を伐り出す人々
1943.4	『文化朝鮮』第5巻第2号 特集 戦ふ森林	老樹仆る
1943.6	『文化朝鮮』第5巻第3号 青年 初夏号 徴兵制に備へて錬成する半島	童心に練る青年達・特別錬成所・
1943.7	『国民文学』第3巻第7号	海にそびえる
1943.8	『文化朝鮮』第5巻第4号 特集 戦ふ朝鮮演劇	僻陬に戦ふ演劇・現地報告・
1943.10	『文化朝鮮』第5巻第5号 清秋号 敢闘する朝鮮鉄道従事員	金剛山に禊する報道人 国民総力朝鮮連盟主催報道関係者視察成会記
1943.12	『文化朝鮮』第5巻第6号 初冬号 半島学徒の決意を訊く座談会	小型溶鉱炉
1944.2	『文化朝鮮』第6巻第1号 早春号 航空決戦と半島	鮮産飛行機のとびたつところ
1944.5	『文化朝鮮』第6巻第2号 新緑号 軽金属増産へ躍進する朝鮮	理研金属工場参観記
1944.12	『文化朝鮮』第6巻第4号 初冬号 敵国降伏	突貫工事

付表3 『山部瓊太郎詩集』収録作品一覧

部	章立て	作品タイトル	扉言葉
序詞		煙草と死—山部瓊太郎氏の遺言—	
第一篇 仔豚の散歩	第一章 生活の緩徐調	深い霧の朝の詩	その頃は僕は常に退屈すると云ふ欠点をのぞいては大へんよい青年であつた。二十二、三の青年らしく、まんどりんを弾ひたり、詩を読んでやつたり、持ち前の諧謔で笑はせたりして、ふしあわせな妹を面白おかしく暮らさせてみた。兄弟三人の…深くつきつめた諧謔などのなかつた静かな生活、願はくば世の中を視祭のごとくほがらかに暮らさうと思つて
		給料日	みたらしい生活、よろこびも悲しみも不平も怒りも甚だしい波曲線を作らなかつた生活の
		秋雨のとき	あだあじお。主としてその生活の反映とみられる作品十一篇をとる。
		冬	
		静かなとき	
		朝	
		短章三片	
		ひもじいゆうぐれの詩	
		こともなく夜になります一つまらないことで	
		みんなねるのです。—	
さむい三月ベチカを焚いて			
いもうと			

		曇天への願求 ふしぎなひとりぼっち 仔牛 秋のくさむらに聴く 第二章 無題 仔豚の散歩 風景 いいゆうぐれ私はちよつと戀をします 雪 三月 早春の空想的なる ひぐれの散歩の詩	僕は仔豚なんかではなかつた。やはり二十二、三の青年だつたのだ。けれども此のセクションにはこんな題をつけるのが、一等いいと思ふ。大てい僕の散歩はひとりだ。きょうだいや友だちとでも、僕の散歩には姿を見せないことが多い。そうして僕は散歩の詩を書いた。それはいくぶん子供っぽくて、孤独で、さびしくて、ときどきはしやいだりしてゐる一寸可愛い詩だと思ふ。地面にころころとゴムマリのやうに歩いてゐる仔豚の姿が、僕にはこの詩を読むとき思い浮ぶ。
第一篇 仔豚の散歩	第三章 お母さんと空想の戀びと	お母さんは死んでしまつた 秋は昔のお母さんの顔である 母はもの怯えする戀びとを想ふ 秋 秋はつめたいなますの味はひ—ある朝とうとうあきがきてみた ころいつばい秋がきてみた— せんちめんたる・いい?にんぐ 春草賦 冬の抒情詩 つめたくてさびしくてベットはしろい	僕は恋びとを持たなかつたけれども、お母さんがかつて持つてゐた。僕はそうして若い詩人らしく空想のなかに恋びとを持つていた。僕には恋びともお母さんも区別のつかない同じものだ。どちらもこの世の中にたくさんあつて、なにもないのだ。僕のお母さんも恋びとも幼い記憶と空想のなかに住んでゐて僕にやさしいのだ。そしてもう記憶も空想も今では遠い日の方へ消えうすれて行つてしまつた。
	第四章 朝鮮風物詩	生きること 雅楽 かち おもに・添景 カシナのゐる風景 部落 ゆうぐれ・お伽話が跼蹐んでゐる 生活	底知れぬ寂しさ、そればかりが僕の朝鮮である。珉太郎の朝鮮詩はいい、と二三の友人から定評をつけられたが、僕自身も愛誦する朝鮮色の濃いものをあつめてみた。
第二篇 常身孤愁記	第一章 王様酪酊	雨と蛇たちと俺 敗北期—草山蛇之介に— 落書雜輯—主として一九二八年頃— 夕雲が佛さまのやうに光るとき—おれはきれいなユトビアンになる— 秋・干 鱈 ヘソ 流れるタクアンの詩 鬱憤の歌 退屈は餌食を求めてゐる 本 白雲賦 王様酪酊 喀血	
	第二章 城津にて	城津でも退屈してゐること 暗い夜と星々のこと トタンの屋根に雨降りて 常身孤愁記	

		古調哀唱 故国のほとりを過ぎて 草原のうた 木履哀唱
第二篇	第三章	甕
常身孤愁記	木履哀唱	冬三賦 刺繍 せるろいと神話一角張細工について— 燈夕 能州のこのわた
		「後記」岡田弘 「父想ふ」宮内克樹 「幼少のころ」兄 宮内倬三 「珉太郎くんを想ふ」加藤八十一 「珉太郎のこと」河野通久 「珉太郎のまなざし」宮原孝佑 「珉太郎の回想」合田佳辰 「霧笛」大世渡貢 「合井時代の珉太郎と僕」鳩三 「編集を終えて」岡田弘
後記		

注

- 1) 警務局図書課による出版物取調調査, 朝鮮出版警察月報の発行開始が『機関車』の発売禁止処分以降であるためどういった要件により差押となったのかはわからない。ただし『機関車』同人の大世渡がのちに詩集を発行した際に, かれが『機関車』の同人であるがゆえに「アナ系」であると官憲側から認識されていたことから『機関車』は「アナ系」のため処分されたと思われる。(京城龍山警察署長「雑誌ベラオンドに関する件」1929年5月28日, 5月30日, 6月4日, 7月4日, 京城地方検事局『思想問題に関する調査書類 7』大韓民国国史編纂委員会が運営する『韓国史データベース (<http://db.history.go.kr/>), 以下韓国史 DB と記載)の検索結果を参照。)
- 2) 愛媛県史編さん委員会(1982)『愛媛県史 資料編 文学』のなかでは「抵抗の詩人たち」の1人としてかぞえられている。また山部の小学校時代の同級生であり, 故郷である小野村の村史編纂委員長をつとめた重松冬楊のコラム「詩人・山部民太郎」(『文化愛媛』愛媛県文化振興財団, 第16号, 1987年)で山部の詩が紹介されている。ほかにも堀内統義(2016)『戦争・詩・時代 平和が平和であるために』(創風社出版)では「被植民者への思いがある」人物として, 日本コリア協会・愛媛編(2011)『植民地朝鮮と愛媛のりびと』(愛媛新聞社)では「朝鮮人のこころによりそった詩人」として紹介されている。
- 3) 木村健二(1989)『在朝日本人の社会史』未来社。
- 4) 李東勲(2019)『在朝日本人社会の形成 植民地空間の変容と意識構造』明石出版。
- 5) 高崎宗司(2002)『植民地朝鮮の日本人』岩波新書。
- 6) 高崎にたいして在朝日本人の能動性に注目するように促した李昇燁の批判(2003)は

- 「書評『植民地朝鮮の日本人』』『朝鮮史研究会会報』第150号, pp 14-15 を参照。李昇燁 (2007) 「植民地の「政治空間」と朝鮮在住日本人社会」京都大学大学院博士学位論文; Uchida Jun (2011), *Brokers of Empire: Japanese Settler Colonialism in Korea, 1876~1945*, Harvard University Asia center.
- 7) 水野直樹 (2020) 「朝鮮在住日本人に対する治安維持法弾圧」『治安維持法と現代』第40号, pp.126-127。
 - 8) たとえば上甲米太郎, 磯谷季次, 三宅鹿之助についての研究がある。
 - 9) 미즈노 나오키 (2020) 「1930년대 전반 재조일본인 (在朝日本人) 의 사회운동과 그 역사적 의미」『인문논총』, 제77권, 제2호. (水野直樹「1930年代前半における在朝日本人の社会運動とその歴史的意味」)
 - 10) 山部は亡くなる2日前に連れ合いの麻子氏にたいして「子供達が海のものとも山のものともわからないから岡田にたのんで自分の書いたものを謄写版でもいいから本にして貰いたい」と、言い残したという。(岡田弘「編集を終えて」岡田弘編 (1954) 『山部珉太郎詩集』私家版, p 166。)
 - 11) 「後記」岡田弘編 (1954) 前掲書, p 129。
 - 12) 岡田弘「編集を終えて」岡田弘編 (1954) 前掲書, p 159。
 - 13) 注12) に同じ。
 - 14) 小野村市編纂実行委員会編 (1960) 『愛媛県温泉郡小野村史』, pp 193-194。
 - 15) 宮内倬三「幼少の頃」岡田弘編 (1954) 前掲書, p 133。
 - 16) 有本芳水は絶大な人気を誇り、『芳水詩集』(1912年)は350版を重ねるベストセラーになっていた。(今田絵里香 (2019) 『「少年」「少女」の誕生』ミネルヴァ書房, p 133。)
 - 17) 宮内倬三「幼少の頃」岡田弘編 (1954), 前掲書, p 135。
 - 18) 宮内倬三「幼少の頃」岡田弘編 (1954), 前掲書, p 136。
 - 19) 同上。
 - 20) 同上。
 - 21) 上田京子 (2013) 『生田春月への旅』今井出版, p 406。
 - 22) 上田京子 (2013) 前掲書, p 193。
 - 23) 生田の反権力的思想の下地には朝鮮半島で生活していた幼少期にも、日本本国に戻ってからも警察や官憲から乱暴な対応を受けたという経験がある。
 - 24) 上田京子 (2013) 前掲書, p 193。
 - 25) 佐々井秀緒 (1973) 『生田春月の軌跡』油屋書店, pp 96-98。
 - 26) 注16) に同じ。
 - 27) 重松冬楊 (1987) 「詩人山部民太郎」『文化愛媛』愛媛県文化振興財団, 第16号, p 84。
 - 28) 同上。
 - 29) 木村健二 (1989) 前掲書, p 19。
 - 30) 山部珉太郎 (1939) 「コスモス二題」『観光朝鮮』朝鮮総督府鉄道局内日本旅行協会朝鮮支部, 第1巻第2号, p 8。

- 31) 注16)と同じ。
- 32) 同上。
- 33) 『職員録』各年版および詳細な人物経歴について韓国史 DB の検索結果を参照。
- 34) 中村資良(1940)『朝鮮銀行會社組合要録』東亞經濟時報社。
- 35) アナキストの思想形成の過程を検討するにあたっては、家庭環境や、軍事的なものへの関与にたいする考察は重要である。たとえば大杉栄は陸軍幼年学校での経験から反権力思想を経験的に身につけていったことはよく知られている。また、ユダヤ系移民の女性アナキストの思想形成について論じた田中ひかるは、家父長的家庭において父が娘に与える抑圧が、かのじょがアナキストにめざめる契機となったのではないかと論じている(田中ひかる「ロシア出身のユダヤ系移民女性がアナキストになった要因に関する考察—移民前のロシアでの経験に焦点を当てて」『歴史研究』第55号、2018年、pp 71-75)。
- 36) 岡田弘「編集を終えて」岡田弘編(1954)前掲書、p 161。
- 37) 山部珉太郎「深い霧の朝の詩」岡田弘編(1954)前掲書、pp 3-4。
- 38) 『職員録』各年版を参照。
- 39) 高利貸しは兼業でなされていたために統計ではその数がわからないのであるが、たとえば幼少期に朝鮮でくらしていた金子文子は自伝『何が私をこうさせたか—獄中手記』(岩波文庫、2017年)のなかで、忠清北道にあった自身が住む家の周囲の日本人集落においてももっとも多い職業が高利貸しであったと回想している。
- 40) 山部珉太郎「給料日」岡田弘編(1954)、前掲書、pp 14-16。
- 41) 山部珉太郎「第一章 生活の緩徐調」岡田弘編(1954)前掲書、p 2。
- 42) 山部珉太郎「ひもじいゆうぐれの詩」岡田弘編(1954)前掲書、pp 14-16; 「いもうと」岡田弘編(1954)前掲書、pp 19-21。
- 43) 山部珉太郎「秋は昔のお母さんの顔である」岡田弘編(1954)前掲書、pp 44-45。
- 44) 山部珉太郎「ゆうぐれ・お伽話が跼踏んである」岡田弘編(1954)前掲書、pp 74-75。
- 45) 山部珉太郎「生活」岡田弘編(1954)、前掲書、pp 75-76。
- 46) 山部珉太郎「おもに・添景」岡田弘編(1954)、前掲書、p 66-67。
- 47) 小野容照(2013)『朝鮮独立運動と東アジア—1910-1925』思文閣出版、pp 13-17; 오장환(1998), 『한국 아나키즘운동사 연구』국학자료원, pp 23-29。(吳章煥『韓国アナキズム運動史研究』); 李浩龍, 勝村誠訳(2010)「植民地期の朝鮮アナキストによる共産主義批判1」『トスキナア』第12号。
- 48) 鄭炳浩(2017)「1920年代朝鮮半島における在朝日本人の階級言説の形成と文芸欄の中の階級闘争」『跨境 日本語文学研究』第2号、pp 19-20。
- 49) 任展慧(1977)「朝鮮時代の内野健児」『季刊三千里』第11号、pp 164-175。
- 50) 内野健児「朝鮮の詩的団体」新井徹(大江他編, 1983)『新井徹の全仕事—内野健児時代を含む抵抗の詩と評論』新井徹著作刊行委員会、p 294。
- 51) 創刊号を直截に確認できてはいないが坂口博(2007, 「内野健児と『亜細亞詩派』」『本

- の手帳』第2号, pp 6-7) が紹介する創刊号目次によると, 同人のなかで合田佳辰(筆名: 草山蛇之介, 詩題「無題」), 岡田弘(詩題「電車/空」), 東牧人(詩題「私を歌ふ」) が参加している。
- 52) 亜細亜詩脈協會『亜細亜詩脈』(国立国会図書館蔵), 2巻1号(1927年1月), 2巻2号(1927年2月), 2巻4号(1927年5月), 2巻6号(1927年8月)を参照。
 - 53) 岡田弘「編集を終えて」岡田弘編(1954)前掲書, pp 160-161。
 - 54) 内野の連れ合いの後藤郁子の回想によれば, 鍾路警察署から呼び出しをうけ「治安維持を害す」と発禁処分について言いわたされたという(後藤郁子「新井徹との道」新井徹(1983), p 548)。
 - 55) 「編集後記」『亜細亜詩脈』第2巻第6号, 1927年8月, p 30。
 - 56) 注54)に同じ。なお『機関車』発足後の『亜細亜詩脈』2巻6号に岡田らの投稿はない。
 - 57) 同上。『機関車』の主要人物である岡田弘や合田佳辰についての検討が必要であるが, 山部以上に関連する史料がなく, 詳細はわからない。なお岡田は1937年から1939年に鉄道局庶務課書記として『職員録』に名前が記載されており, 岡田が朝鮮へわたってきた1920年代なかばには非正規の現業職であったのが正規職員へと社会上昇したことがわかる。ただし1939年には鉄道局勤務をやめている(岡田弘「編集を終えて」p 164)。合田佳辰は1930年代に日本本国で社会運動を実践したことから合田の来歴が『近代日本社会運動史人物大辞典』(紀伊国屋書店, 1997年, p 493)に収録されている。また『職員録』に合田の名前が無いことから, 1920年代後半に勤務していた鉄道局では非正規の現業職であったことがわかる。
 - 58) 同上。
 - 59) 内野健児「半島詩壇の動向」新井徹(1983)前掲書, p 331。
 - 60) 筆者が閲覧した史料は, 水野直樹氏が個人で所蔵する『機関車』第1号から第3号である。史料収集と閲覧にあたって便宜を図っていただいた。『機関車』を閲覧できなければ, 筆者は本稿を書くこともままならなかった。記してここにお礼を申し上げたい。なお第4号と第5号は未確認である。
 - 61) 合田佳辰「珉太郎の回想」岡田弘編(1954)前掲書, p 144。
 - 62) 朝鮮総督府編(1925)『朝鮮総督府及所属官署職員録』, p 122。
 - 63) 注62)に同じ。
 - 64) 合田佳辰「珉太郎の回想」岡田弘編(1954), 前掲書, pp 144-145。
 - 65) 『機関車』第1号, 機関車, 1927年6月。
 - 66) 同上。
 - 67) 中野重治が『驢馬』第5号(1926年9月)で発表した詩「機関車」から影響を受けたのではないかと筆者は推測している。中野の詩「機関車」は, 大世渡の散文同様に「機関車」の機械構造と運動のイメージをかさねて描写したものであるからである。本文で後述するように同人らは「日本本国」の文芸界に関心の射程に入れていたこともあり,

- 「日本本国」の文藝界の動向には敏感であったと思われる。
- 68) 大世渡貢 (1927) 「機関車構成」『機関車』第1号, 機関車, p 18。
- 69) 「編集後記」(1927)『機関車』第3号, 機関車, p 37。
- 70) 岡田弘は「崩れ行く鋳型」のなかで「内地」の「ブルジョア文学」を猛烈に批判し、プロレタリア文学の普及を訴えている。(『機関車』第2号, 機関車, p 2。)
- 71) 岡田弘「後記」岡田弘編 (1954), 前掲書, p 129。
- 72) 山部珉太郎 (1927) 「朴爺さんの小さい家」『機関車』第2号, 機関車, pp 28-34。
- 73) 当時は朝鮮在住であってもなお、旅行者とかわらないステレオタイプな朝鮮へのイメージを在朝日本人が文章にすることが大衆的な作品においては期待されていたという (楠井清文 (2010) 「植民地期朝鮮における日本人移住者の文学——文学コミュニティの形成と「朝鮮色」「地方色」」『アトリサーチ』第10号, pp 8-9)。
- 74) なお1940年になっても京城における孤児は街中にあふれ、そのようすのある在朝日本人はこのときにおける山部とはことなり、都市社会における「チンピラ」として冷酷な筆致でかれらを描いている (冬木房 (1940) 「子供」『観光朝鮮』第2巻第5号, pp 60-61)。
- 75) 山部珉太郎 (1927) 「爽快な奴等」『機関車』第3号, 機関車, 裏表紙。
- 76) 李浩龍, 訳: 勝村誠 (2010年) 「植民地期の朝鮮アナキストによる共産主義批判1」『トスキナア』第12号。
- 77) 山部珉太郎 (1927) 「神様を絞殺した話」『機関車』第3号, 機関車, pp 19-20。
- 78) ルバシカ rubashka はロシアの農民服に由来する上着である。ルバシカにはロシア革命以降の社会主義的イメージがあり、日本では一部の社会主義者のあいだで愛用されていた。(喜多孝臣 (2009) 「芸術家たちの衣服—日本におけるルバシカのイメージ」『早稲田大学會津八一記念博物館研究紀要』第11号, pp 11-25。)
- 79) 合田佳辰「珉太郎の回想」岡田弘編 (1954), 前掲書, p 145。
- 80) 鄭根植 (2014) 「植民地検閲と「検閲標準」」紅野謙介他編『検閲の帝国 文化の統制と再生産』新曜社, p 36。
- 81) 同人の合田佳辰は、それらアナキストたちのなかでもとくに『階段』という同人誌を「内地」で発行していたシユミット毅の名前をあげているが、かれは内野健児とも懇意にしていた。シユミット毅は『朝鮮及満洲』に「緑りの夜の世界が降る黒い旗」という、いかにもアナキズムを主張する散文を、朝鮮エスペラント学会を設立した大山時雄が編集長をつとめる『朝鮮時論』にも寄稿している。
- 82) 合田佳辰「珉太郎の回想」岡田弘編 (1954) 前掲書, pp 145-146。
- 83) 岡田弘「編集を終えて」岡田弘編 (1954) 前掲書, p 161。
- 84) 「落書雑輯—主として一九二八年頃—」は、10の短文からなっている。本文では、山部の権力にたいする思想をよみとれる箇所をとりだして引用している。(岡田弘編 (1954), 前掲書, pp 83-86。)
- 85) 合田佳辰「珉太郎の回想」岡田弘編 (1954) 前掲書, p 146。

- 86) 加藤八十一「珉太郎君を想ふ」岡田弘編（1954）前掲書，p 137。
- 87) 『詩集』におさめられていないため，内容を確認することはできない。（岡田弘「編集を終えて」岡田弘編（1954），前掲書，p 162。）
- 88) 岡田弘「編集を終えて」岡田弘編（1954）前掲書，p 163。
- 89) 注1) に同じ。
- 90) 岡田弘「編集を終えて」岡田弘編（1954）前掲書，p 163。
- 91) 山部珉太郎「城津でも退屈してゐること」岡田弘編（1954）前掲書，pp 106-107。
- 92) 「後記」岡田弘編（1954）前掲書，p 128。
- 93) 「後記」岡田弘編（1954）前掲書，pp 129-130。
- 94) 岡田弘「編集を終えて」岡田弘編（1954）前掲書，p 162。
- 95) 同上。
- 96) 미즈노 나오키（2020），前掲論文，p 156。
- 97) 合田佳辰「珉太郎の回想」岡田弘編（1954）前掲書，p 146。
- 98) 河野通久「珉太郎のこと」岡田弘編（1954）前掲書，p 141。
- 99) 岡田弘「編集を終えて」岡田弘編（1954）前掲書，p 164。
- 100) 朝鮮総督府編『朝鮮総督府及所属官署職員録』各年版を参照すると1937年から38年は書記等級7級，1939年には月給70円，1940年には6級，1941年には5級と階級上昇していることがわかる。山部同様に雇員から判任官に階級上昇した鉄道局職員について木村健二（2019）がその個人史を論文化しているが，木村によれば本棒と判任官以降であれば加棒（植民地での勤務者にたいする給料優遇）を支給されるため給料はわるくなかったという（「在朝日本人鉄道従事員の戦時と戦後」木村健二他編『近代朝鮮の境界を越えた人びと』日本経済評論社，pp 173-179）。さらに山部は1930年代後半以降の京城時代には宿舍に入っており宿舍料も支給されていたと思われるため，生活費においてこれまで以上に困難になることはなかったと思われる。職員の宿舍料については岡本真希子（2008）『植民地官僚の政治史朝鮮・台湾総督府と帝国日本』（三元社，pp 207-212）を参照。
- 101) 『観光朝鮮』の概要と詳細な創刊過程については拙稿（2021）『「観光朝鮮」解説・総目次・索引』（クレス出版）を参照のこと。
- 102) 岡田弘「編集を終えて」岡田弘編（1954）前掲書，pp 164-165。
- 103) 合田佳辰「珉太郎の回想」岡田弘編（1954）前掲書，p 147。
- 104) 『京城日報』1943年7月25日。
- 105) 注86) に同じ。
- 106) 山部珉太郎（1943）「海にそびえる」『国民文学』人文社，第3巻第7号，pp 18-19。
- 107) 山部珉太郎（1939）「なつかしき南鮮」『文化朝鮮』朝鮮総督府鉄道局内日本旅行協会朝鮮支部，第3巻第1号，pp 16-17。
- 108) 山部珉太郎（1942）「鉛と亜鉛の出る金山」『文化朝鮮』朝鮮総督府鉄道局内日本旅行協会朝鮮支部，第4巻第2号，p 47。

- 109) 山部珉太郎 (1943) 「僻陬に戦ふ演劇・現地報告・」『文化朝鮮』朝鮮総督府鉄道局内日本旅行協会朝鮮支部, 第5巻第4号, p 52。
- 110) 山部珉太郎 (1939) 「龍山寺紀行」『観光朝鮮』朝鮮総督府鉄道局内日本旅行協会朝鮮支部, 第1巻第1号, pp 44-47。
- 111) 注 107) に同じ。
- 112) 注 108) に同じ。
- 113) この点についてはとくに、「内鮮一体論」が広がるなかで朝鮮人と日本人の見分けがつかなくなる, すなわち帝国日本の支配が浸潤していくようすを「顔が変わる」というレトリックで表現したこの李光洙の発言を「韓国併合」からの朝鮮における「人種」概念の変遷とのかかわりで言及した李昇燁 (2009) 「顔が変わる——朝鮮植民地支配と民族識別」(竹沢泰子編『人種の表象と社会的リアリティ』岩波書店, pp 153-156) を参照のこと。
- 114) 宮道孝佑「珉太郎のまなざし」岡田弘編 (1954) 前掲書, p 143。
- 115) 合田佳辰「珉太郎の回想」岡田弘編 (1954) 前掲書, pp 147。
- 116) 同上。
- 117) 同上。
- 118) 岡田弘「編集を終えて」岡田弘編 (1954) 前掲書, p 165。
- 119) 小野村市編纂実行委員会編 (1960) 『愛媛県温泉郡小野村史』, pp 336-356。
- 120) 岡田弘「編集を終えて」岡田弘編 (1954) 前掲書, pp 165-166。
- 121) 同上。
- 122) 河野通久「珉太郎のこと」岡田弘編 (1954) 前掲書, p 141。
- 123) 岡田弘編 (1954) 前掲書, 巻頭。